今月の御教え

無学で人が助けられぬということはない。学問はあっても真がなければ、人は助からぬ。学問が身を食うということがある。学問があっても難儀をしている者がある。此方は無学でも、みなおかげを受けておる。

……金光教祖御理解　第九十九節……

解説

このお言葉は、決して学問を否定しているものではありません。学問は大切なものであり、教祖ご自身も、当時の一庶民たる農民にしては「読み、書き、算盤」と言われる基礎的な教育を受け得られたからこそ、教祖ご自身の筆による「覚書」等の遺筆が後世に伝えられ、生神に至るまでの信心の成長過程が詳しく広く知られる事となったのであります。しかし教祖様は、学問・知識も、その根本に信心に培われた『真』の心があってこそ、人々のために役立つのだ、と仰るのであります。即ち教祖様は当時、碩学の方々が、正しい事と信じて疑わなかった「日柄、方位の吉凶」を「迷信である！」と看破されたり、又、当時は医師でさえ捨てることを指示していた『初乳』を「産後、親の乳をすぐ飲ませよ！」と、その摂取の必要性を説いておられますが、医学界においてその事が解明されたのは、昭和も終戦後から暫く時を経てのことでありました。即ちそれまで、如何なる学問、学識でも解明できなかった真実を、既に百年も前から教祖金光大神様はご存じであったことは、驚くべき事であり、正に冒頭の「学問はあっても真がなければ、人は助からぬ。無学でも、(真があれば)みなおかげを受けておる」との御教えの通りであり、これこそが信心の御蔭であり徳であります。